

生徒たちが 安心できる教室に

川西南中学校 校長
株本 一男さん



生徒に合わせて
学びの機会をつくる

「生徒一人一人に合った学びの場をつくり、学習機会の場を守っていききたい」
そう話すのは、川西南中学校の校長・株本一男さん。同校では、4年前から空き教室を利用して「若葉学級」として不登校支援を開始。しかし、当時は専門の支援員などがいなかったため、適切なサポートができませんでした。

令和4年度からは、市内の全7中学校、5年度は全16小学校に校内サポートルームとして支援員が配置されています。

生徒を支え
安心できる教室に

同ルームに、支援員が配置されたことで、生徒たちの居場所だけでなく、学びの場としても活用できるようになりました。

「校内サポートルームができるまでは、自分の居場所として利用してもらっていませんでした。しかし、学校は学びの場。生徒に寄り添う支援員を配置し、多様な学びの機会をつく



さまざまな事情で教室に行きたくても行けない子どもたちが、自分のペースで安心して学びを進められる居場所のこと。令和4年度から市内全7中学校に、5年度から市内全16小学校に設置し、専任の支援員を各校に配置しています。

設置の目的

- ▷ 学びの場における選択肢を増やす
- ▷ 生徒に関わる人を増やす

活動内容例

- ▷ 問題集などを使用した自主学習
- ▷ タブレットを使用してオンライン授業に参加

要です」

生徒への理解を深め
学級づくりを充実させる

ることが必要でした。現在、支援員は一人一人の生徒の心のケアをしながら、個々に応じた学びのサポートを行っています。その結果、3年生の中には通常の教室に戻ることができた生徒も。学校として不登校支援が、大きく前進していると考えます」

一方で、同ルームを運営する上で必要なこともあると株本さん。

「校内サポートルームを利用する生徒の中には、人とのコミュニケーションを取りたいと思っても、実際は取ることが苦手な生徒もいます。今後、彼らの気持ちに寄り添って支えていくことが必

同ルームを利用することで、自分の居場所として利用したり、本来のクラスに戻ったりするなど、生徒たちが望む形で後押しができればと株本さん。

「私たち教員や支援員が生徒への理解を深め、『一人の人間として大切にされている』と実感できる授業づくりや学級づくりを充実させることが必要です。生徒自らが、自分の意志と判断で進路を決めることができるようにサポートしていきます」



体験を通じて 食に興味を持つ

子どもたちの好奇心を刺激し、食育への理解につなげる

クリーニングのトラブル

受け渡しの時には 店の人と一緒に確認しましょう

事例1 浴衣をクリーニングに出した。刺繍の部分がボコボコした状態で戻ってきた。今までクリーニングでこのような状態になったことはない。苦情を言うとやり直してくれたが直っていなかった。業者から仕立てが悪いとか最初からボコボコになっていたなどと言われた。(70歳代女性)

事例2 冬休みに入ったので子どもの学生服をクリーニングに出した。受付時に店の人が点検していたが何も言われなかった。一週間後、引き取りに行くとき黒カビのような汚れがついていた。業者は学生カバンの色が移ったものでクリーニングしたことで目立つようになったのではないかと言うが納得できない。(40歳代女性)

回答 クリーニングのトラブルでは原因を特定するのはきわめて困難です。クリーニングを出す時や、受け取る時には必ず店の人と一緒に衣類の状態を確認することが大切です。

Sマーク（厚生労働大臣が認可した「標準営業約款」に基づいて営業している店に付けられる）や、LDマーク（全国クリーニング生活衛生同業組合連合会の加盟店に付けられる）がある店舗では、トラブル解決のために「クリーニング事故賠償基準」を設けていますが、6カ月以内に申し出なければ補償されません。自社ルールを設けている業者もあるので事前に確認が必要です。また、受け取った後はカビや変色を防ぐためビニールカバーを外して収納しましょう。困ったときには消費生活センターに相談してください。

秋の旬を満喫できる食育体験、芋掘り。川西こども園の園児たちが毎年行う芋掘りに参加しました。

子どもたちは、畑へ向かうバスの中からワクワク。友達と一緒に掘りながら虫が出てきて驚いたり、大きなイモを掘り出して喜んだり。うれしそうにイモを持ってスイートポテトやスープを作ってもらうなど、収穫したイモの食べ方まで想像しているようです。

日々の体験、特に今回の芋掘りのような直感的に楽しめる食育は子どもの人間性を育む上で特に効果的です。自分の手で土を掘り、イモを収穫することで、食べ物がどのように育ち、収穫されるのかを実際に体験します。食べ物に対する感謝の気持ちを育み、食事について新しい視点も生まれることでしょう。

友達と一緒にイモを掘り出すことで、協力する楽しさを体験し、社交性を育むのにも役立ちます。土に触れ、植物の成長を目にし、自然の不思議さを感じることで、好奇心が刺激されます。また、食べ物の扱い方や調理方法を知ること、食に興味を持ち、食事が楽しいと思えるでしょう。

今回の芋掘り体験に限らず、農業を体験することは、子どもたちにとって楽しい学びの場であり、食育を通じて生きていく上での大切なスキルを身に付ける良い機会となっています。

愛情表現のすれ違い

Vol.2

相手が受け入れる愛情表現をすることで きっと気持ちが伝わるよ！

前回は、私と娘の「愛情表現のすれ違い」が引き起こした悲劇をお伝えしました。実は、「愛情表現には五つの種類があり、自分の得意な表現でないお互いに理解できない」と、アメリカの結婚カウンセラーのゲーリー・チャップマン氏が提唱しています。その表現は、「ポジティブな言葉」「一緒に過ごす時間」「気持ちのこもった贈り物」「タイムリーなサービス行為」「心地よいスキンシップ」。この五つ全てが得意な人もいれば、一つだけの人もいますし、年齢とともに変化もするそうです。大切なのは、「相手が受け取れる表現方法で伝えないと、せつかくの愛情が伝わらない」と知ることです。

我が家の場合、「一緒に過ごす時間」を愛情と感じていた娘に対し、私は自分の得意な『気持ちのこもった贈り物』だけを届けていたので、すれ違ってしまいました。もし当時それに気づいて、手の込んだケーキを焼くより、一緒にテレビを見たり、絵本を読んだり、娘に伝える方法で愛情表現できていたらと思うと残念でなりません。

相手の得意な愛情表現を知るには、「相手がどのように愛情を表現しているか」と、不満をもらす言葉に注意してみて。「ママ、大好き」と言ってくれるなら、言葉が愛情表現。「いつも独りぼっち！」と嘆いていたなら「一緒に過ごす時間」が欲しいという合図。人は自分を基準に物事を判断しがちですが、みんな違って当たり前なんですよ。お互いを大事に思う気持ちも、相手に合わせて表現することでしっかり伝わります。(会話の泉事務局長 コミュニケーション・サポーター 横山由紀子)